

論 説

播磨大藏院考

玉村竹二

一 序説

五山の文筆僧中巖圓月の詩文集を『東海一漚集』といひ、上村觀光居士の『五山文學全集』の第二巻に収められて、夙に世に流布してゐるが、その底本は、明和年間に出版され、「大藏院」といふ寺院の藏版にかかる木版本である。同時に中巖の語錄『佛種慧濟禪師語錄』も同院藏版で木版になつて居り、この詩文集（五巻）語錄（二巻）と共にその最終巻の巻末に、左の通りの跋文がついてゐる。

江山大解老、以其念切於法、於此錄亦切々矣、雖片言隻字、尋討諸方、不憚遠近、時來予山庵、或商畧之、予曰、

佛種禪師、萌芽於劫外、發花於法界也、豈容論說乎、但扶桑未聞其芬芳者、蓋時未到耶、公今盡心於此、正其時歟、何不發揚使人々鼻孔達天也耶、老禪笑而點首、於是乎、上粹事決、老禪托予以校訂、予含糊耳、而老禪俄爾冴寂、遺言於予、亦切々矣、且其嗣法、秀峰座元、徵予尤勤、可謂幹父之蠱、吁、其校訂、予非其人、雖然徐子在墓、季札之劔不得不挂焉、至於魚魯猶誤、訓義差池、豈可免耶、仰待諸方具眼人之貶剝、

明和改元甲申仲冬

前臨川桂洲道倫謹跋

(印文「道倫社多」白文)

(印文「桂州」)

とあり、また同じく巻首に附けられた南禪寺金地院塔主にして當時の

東播明石江山老隱大鮮宗脫拂識

(印文「宗脫之印」白文)

印影

(印文「大解」)

印影

これによると、この出版を企てた人は「江山」の「大解」といふ人であることになる。「江山」とは何處であるか、「大解」とは如何なる

赦謚仏種慧濟禪師中岩和尚、正中元年入元、嗣法、
東陽德輝禪師、元弘二年、帰本朝、而董范平安閩東數處名藍、振起普
覺宗猷、大開爐鞴、陶冶生徒、實是古仏風規、後人模範也、有語錄

垂誠、有外集、曰東海一漚、其波瀾浩渺、難窮涯涘、其体製氣象、

高古源遠、彷彿于巖巒白雪、幽谷春花、

師戢化、已經四百余歲、語錄外集、秘在于三所精藍、其法孫播州明

石大藏院主大解老禪、手自贍寫之、而欲鏤梓以示後學焉、今茲壬午

季春、予

(南禪寺)

賜暇、暫旋竜山、老禪乃到冰雪窩、演志願翻縷、乞予序之、予愚昧

凡才、不習文辭、且院務饋掌、不遑啓處、再三固辭、老禪日々懇求

不已、因不顧醜拙、乃題某首爾、

寶曆壬午仲夏

前住南禪見僧錄司金地蒼溟元方

(印文「元方之印」白文)

印影

(印文「蒼谷」白文)

印影

とある。これらによると、「江山」とは大藏院の山號の略称らしく、その江山大藏院は播磨明石に在り、その開祖は仏種慧濟禪師中巖圓月その人自身であり、「大解」とは大解宗脫といふ僧で、大藏院の前住であるのを知ることが出来た。

以上のことがらのみから考へると、播磨の明石に中巖圓月の開山にかかる大藏院といふ寺院があり、その寺の住持大解宗脫といふ人が、開山の徳を偲んで、ある時に、同院に傳はる中巖の遺藁を整理出版し同院の藏版とした。しかしその当時（寶曆明和頃）まで、中巖の法系が残つてゐる筈もなく、蒼溟の序にある「法孫」とは、言葉の「あや」で、同院は江戸時代に入つてからは中巖の属する五山派から、他派に転属し、法系も入替つて居り、宗脱の「宗」といふ系字から推察して、これは大徳・妙心両寺派下の系字であるから、恐らく、大徳寺か妙心寺の末寺になつてゐたのであらう。しかも大解宗脱は開山に對する尊崇の念が法系の異同を超越して強かつたので、この遺藁出版を敢て行つたのであらうと、従来はただ漫然とさう考へて居るだけで、そ

れ以上突込んで穿鑿しなかつた。

ところが今回、必要あつて、『東海一漚集』の校訂を行はなければならなくなり、同書版本の藏版者である大藏院について、調査しなければならなくなつた。まづ同院が現存するか否かを検するために『日本寺院総覧』について見たところ、兵庫県明石町大藏谷といふところに大藏院が現存し、臨濟宗南禪寺派に属し、開山は中巖圓月、嘉吉年間の開創と見えてゐた。よつて少くとも『総覧』の出版された大正初年には現存したことを知つた。それと同時に二つの疑問を生じた。その一は、開創が嘉吉年間であり、中巖（応安八年正月八日示寂）の示寂後六十數年を経てゐるといふ年代齟齬があること。その二は、中巖の塔所は建仁寺妙喜庵であり、中巖の開創した寺院は中世以來の禅宗の慣習によれば、その塔所の末寺として隸屬するのが通例で、その原則に従へば、大藏院は、建仁寺妙喜庵末でなければならず、したがつて、現在の制度によれば建仁寺派に属さなければならない。尤も、早くから大徳・妙心等、五山派以外の宗派に轉じしまつたのならば、まだ理屈がわかるが、同じく五山派である南禪寺派に属するといふことが、甚だ不思議である。これらの疑問を解するためと、同院藏版の『東海一漚集』及び『仏種慧濟禪師語録』の版下本か、「もと本」となつた傳寫本が現存するかどうかを知るために、一度同院を訪れたいたと思ふこと切になつた。

宛も私の夙知である東京芝の金地院の住持松浦勝道師に、同じく南禪寺派であるといふ理由で、同院が現存するかどうか、若し現存するならば、一度参詣したい旨を申出たところ、同院は空襲を免れて現存し、同院の副住職は同師の俗弟であるといふ深い因縁がある由で、早速に手筈を整へていたとき、昭和四十四年九月二十日、同院を訪れることが出来た。ところが、その結果が、從來漠然と考へてゐたこと、あまりに違ひすぎ、意外の事實が多く見出され、改めて大藏院研究が必要となつてきたのである。

二 大藏院の世代

まづ大藏院の沿革をあとづける試として、同院に現存する住持世代記三種のうち、享保十八年の記錄に成る『前住統記』と題するものを引用すると、左の通りになる。

當寺開山

弘種慧濟禪師大和尚

世鑑倉之人
世壽七十六歲

永和元卯年正月初八日示寂、至今享保十八丑年、既得三百六十

歲、一年相違、
年齡

中興開山

天翁慶祐座元

未詳生年、
蓋當壬午

寛永十二亥載三月十五日歿化、至今享保十八丑年、既得九十九

歲、

右兩開山之間、二百六十載、中圯而不知何人住山、故無歷代之

牌位、又無耳聞之覺矣、蓋天下不平、干戈時起、萬民不得其

所、神社多是破壞、無由修治、終成草庵茅屋、而同民家者乎、

得岩宗鑑首座禪師

當鄉之人

慶安四卯年四月七日円寂、至今享保十八丑載、既得八十三年、

舊田知藍座元

同前

天和二戌年正月七日歿化、至今享保十八丑歲、既得五十二年、

舊田和尚者、當村之人、妙心下之尊宿也、國カ初從乾谷師翁到關東

古河、住居于東林寺、漸老心孤、遂歸生園、情近天倫、于時當

山宗鑑首座円寂之後、相爲看院、未幾隱于少林庵、大法衣、尚

在于當山、宗盟不淺、祭之、宜以先住之禮、

蘭洲祖秀首座禪師

大坂之人

正徳二辰年七月初八八日円寂、至今享保十八丑載、既得二十二

年、

南嶺宗常座元禪師

當村之人

享保十四酉年十二月三日歿化、至今

見江院殿前常州太守道元性觀大居士

大藏院殿梅巖芳公大禪定尼

右兩員者、當寺創建大檀越、而赤松六代孫祐尚公夫婦牌也、嘉

吉元酉年五月六日、壽六十九載薨、至今享保十八丑年、既得二

百九十三年、於此相考、開山示寂之時、檀越未離父母之懷、蓋

以後慕道德而勸請者乎、今也物換星移、其裔孫無來尋者、雖然

永代獻飯諷經好矣、

右享保十八丑歲二月念五日、因本

師乞

法嚴老師之言誌焉、後見者亦連歷代名簿、以可授弟子者也、

臨濟三十五世大円宗脫拜書

追筆法嚴珉和尚禪師

鳥羽新田人

延享元甲子年四月十五日歿化

またもう一本『見江山大藏禪院歴世紀事』と題するものによると、

開山弘種慧濟禪師中巖圓月大和尚

創草檀越赤松常陸介和尚

第二世天翁慶祐

第三世得岩宗鑑

第四世舊田智藍

第五世蘭州祖秀

第六世南嶺宗常

第七世法岩宗珉

第八世大解宗脱
第九世秀峰宗逸

第十世鳳州宗眼

とあり、それぞれの條下に略傳がついてゐるが、今は省略した。また

第三の世代記に『曆代年譜考』なるものがあり、それには

開山惠濟禪師

示寂永和元乙卯年正月八日
明治卅年既得五百二十三年

二世天翁和尚

示寂慶永十二乙亥年三月十五日
明治卅五年既得五百三十三年

三世得岩和尚

示寂安四辛卯年四月七日
明治卅四年既得五百四十七年

四世舊田和尚

示寂天和二壬戌年正月七日
明治卅年既得五百四十七年

五世蘭州和尚

示寂正德二壬辰年七月八日
明治卅五年既得五百八十六年

六世南嶺和尚

示寂享保十四己酉十二月三日
明治卅年既得五百六十二年

七世法岩和尚

示寂延享元甲子年四月十五日
明治卅年既得五百五十四年

八世大解和尚

示寂寶應十二壬午年九月十四日
明治卅年既得五百三十六年

九世秀峰和尚

示寂寛政二年二月十八日
明治卅年既得五百六年

十世鳳州和尚

示寂文化六年十二月十一日
明治卅年既得八十九年

十一世春莊大和尚

示寂弘化二年六月廿八日
明治卅年既得五十三年

十二世固道西堂

示寂明治三年三月十六日
明治卅年既得廿八年

十三世月窓大和尚

示寂明治廿六年八月十五日
明治卅年既得五年

と見える。

三 開山と開基とに就ての再考

さて大藏院の開山が本當に中巖円月であらうかといふ問題である。開基が嘉吉年間の人で、しかも開山が七十年も以前に示寂した中巖であるといふことは、假にあるとしても勸請開山である。とすればこの外に事實上の開山がある筈である。即ち中巖の法系に連る、二世三世の法孫の某中といふやうな人の名がわかつてもよい筈である。如何に寺が退轉しても開基の名が傳へられるならば、それと並立する開山

(ここでは事實上の)の名が忘れられ、勸請開山の名だけが傳へられるといふのは奇妙である。寧ろ開基の名も不明な方が眞實性が窺へるといふものである。假に中巖円月が名實共に開山したとして、その際の開基の名が失はれ、その後某僧が中興開山して——それが嘉吉年間のこととして——その際の開基、いはゞ中興開基の名がのこって、それが見江院殿道元性觀大居士(赤松祐尚)であった。即ち現在わかつてゐる開山と開基の名が、一次元づつ離れてゐると見る方法もある。中巖は關西・關東と農後萬寿寺との間を何度も往返してゐるから、途次、山陽の一村落に庵居を構へる可能性は十分にある。しかし中巖には自撰の年譜『自歴譜』があり、それには、ほんのわづかの假の庵居のことまで出でてゐる(例へば奥州相馬の龍澤庵のことなど)そして大藏院のことは所見がないのである。といふことは中巖生前の開創とは考へにくくなつたことは言ひ切れないのである。⁽¹⁾

さうなれば、嘉吉年間開創説によらなければならない。そのときの開基檀越が赤松祐尚であるといふ。ことになる一概に赤松氏は一族を挙げて臨濟宗一山派に歸依してゐるのである。餘程のことがない限り、他派の人の檀越となることはあり得ない。例へば、一族出身の禪僧にして、偶々他派に属する人が一寺を開創するやうな場合に限られるのではないか。加之、この赤松祐尚の法名「道元性觀」の系字「性」は一山派が赤松一族にひらく與へてゐるものである。例へば赤松義則は延齡性松、満祐は性具といふやうにである。

その上、赤松祐尚が開基だとすれば、その院號と現在の寺院名とが合はないのはどうしたことであらうか。赤松祐尚の法號の院號「見江院」が、現在では山號となつてゐるのである。現在の寺院名たる大藏院は、その夫人だといはれる人の法號「大藏院殿梅巖芳公大定尼」の院號と一致するのである。それならば、この寺の開基は赤松祐尚夫人の開基といはれなければならない筈である。それが夫の祐尚を開基とするところが不思議である。世に二つの寺院が併合したとき、その一つ

の寺名を山號として残すことがある。若しこの傍例を以て類推すれば、現今の大藏院は、見江院といふ古刹と、大藏院といふ寺院が、ある時期に併合したが、その際主体となつたのは大藏院の方で、見江院はこれに吸収される形になつた。見江院の開基檀那は赤松祐尚であつたことはまづ間違ないとして、更に想像を逞しくすれば、その法名の系字「性」から判断して、この見江院の開山は一山派の禪僧が開山であつたともいひたい。一方大藏院といふ禪寺があつて、その開基が大藏院殿梅巖芳公大禪定尼であったとする。そして、この方が開山が、名實とも合致する開山にしても、法孫が事實上の開山で、勸請したにしても、とにかく開山が中巖圓月であつたとするることは出來る。

たゞ大藏院殿梅巖芳公大禪定尼が、果して見江院開基の赤松祐尚の夫人であるのかどうか。二寺が合併するときに、そんなに都合よく、夫婦の開基になるもの同志が一緒になるといふことは、全くないとはいへないが、奇蹟に近いことである。それに法名の稱呼法が夫婦それぞれ異なるのも氣にかかることである。見江院殿の方は道號法名四字連稱して道元性觀といふのに、大藏院殿の方は梅巖芳公と、法名の上の一字を闕ぎ、しかも「公」といふ敬稱を附してゐるのがその相違の第一である。しかしこれは、異なる寺院でそれぞれ稱し來つたもので、流儀が違つたものを併合後も調整せずにそのまま繼承したとすれば、それでよい。殊に永い間、法名の系字を省いて稱してゐると、本當にその系字が忘却されてしまふから、梅巖の方の法名を二字に復原しようにも出来なくなるといふ事情も考へられるから、この方の差違は一應問はないとしても、第二の差違である「大居士」と「大禪定尼」の方はどうであらうか、夫が「大居士」なら妻も「大姉」でなければならず、妻が「大禪定尼」ならば、夫は「大禪定門」でなければならない筈である。この稱號は、矢鱈に変更されないものである。それが不揃なのはどうも解し難い。夫の祐尚の「見江院殿」の方は、世間流布の赤松氏の諸系図にも載つてある法名であるから、これは間違ない

ところであるが、妻の大藏院殿の方は、それらのいづれにも見えない。見えないからすぐに否定することも出来ないであらうし、隠れたところにその妻の開基する寺があつて、その寺の位牌過去帳のみによつて、その名が傳はるといふことも勿論有り得ることであるが、法名の稱呼方の差違などの傍證から推して、どうも梅巖芳公禪定尼が赤松祐尚の夫人であるといふことは、甚だ疑はしくなる。「禪定尼」といふ稱呼は、若しそれが貴顯の人の法名に付けられてゐるとすれば、甚だ古い時代の人といはねばならない。鎌倉時代から南北朝中頃までは、高貴な人の法名はみな大禪定門・大禪定尼であり、特に參禪の行蹟があり、ある程度悟入が肯はれた人のみが居士・大姉と呼ばれてゐた。したがつて、梅巖は、若し古い年代の人と考へれば鎌倉南北朝の人といふべく、それならば、中巖圓月自身の外護者であり得ると思ふ。更に禪定門・禪定尼の稱號は、室町時代には、稍その姿を消すが、江戸時代になって再びあらはれる。しかしこのときは院殿大居士、院居士のその下の格式の法名につけられる稱號となり、相當に身分の卑い人の法名の稱呼法に用ひられ、その場合には院號などは勿論ない。して見ると、院殿號をもつこの梅巖は古い時代の人と見なければならない。して見ると、院殿號をもつこの梅巖は古い時代の人と見なければならない。⁽²⁾しかし兩寺併合當時、その俗名は既にわからなくなつてしまつてゐたのではないか。

そして併合ののちは、兩寺關係の開山開基について声誉の高いものを残した。見江院は一山派の某人の開山であつたであらうが、併合當時忘れられてゐたか、又は大藏院開山よりも有名でなかつたかの理由で、開山には有名（といつても勅諡号をもつてゐる偉さうな尊宿）だといふ理由で大藏院側のものを採つて、中巖圓月と定め、開基の方は、俗姓俗名のはつきりわかる赤松祐尚を探り、大藏院開基として傳へられた梅巖尼を、理由もなく開基赤松祐尚夫人に擬してしまつた形跡があるやうに思へる。

然らば、この併合説が一定したのは何時であつたであらうか。一應

は寺記記事のはじめである天翁慶祐座元の寛永年間に、既に出来上つてゐるとも考へられるが、私は享保初年説を採りたい。その理由は、前掲の第一種の寺記の識語に

右享保十八丑歲二月念五日、因本〔歸カ〕法巖老師之言誌焉、後見者亦連歴代名簿、以可授弟子者也、

臨濟三十五世大圓宗脫拜書

解

とあるのによる。これによると、この寺記は、享保十八年、大藏院の徒大解宗脱が先師である法岩宗珉の言によつて誌したもので、それに開山は中巖、開基は見江院殿・大藏院殿夫妻であるとしてある。そしてもう一つ思ひ合せられることは、幕府が享保六年から七年に亘つて、ひろく各宗寺院に對して本末由緒を書上げさせてゐるといふことである。これを契機に、各寺院で寺誌縁起世代記由緒書が多く作られてゐる。それらはいづれも書上の必要上調査をし、その結果が意外にも貴重であることに氣付いた諸寺は、その控を基にして、これらの覺書をまとめたところが多いが、一方その書上げを飾るために、多少の粉飾をしたところもある。大藏院も、これを機會に由緒を定めなければならなくなり、従来曖昧混同して傳へられてきたものを、右の寺記のやうに整理したものと考へる。したがつて、この説の確立は享保六七年頃、これを立案した人は外ならぬ法岩宗珉であるといふことになる。³⁾

四 開山中巖圓月への再認識

法岩宗珉が、若し中巖圓月を大藏院の開山として固定したとしても、見江院開山の某人よりは、敕謚號があるだけに名の通つた人であると考へた程度で、未だ中巖の行狀の何たるかを知らなかつたやうである。それは法岩の説として大解宗脱が記録した寺記『前住統記』に中巖のことば

仏種慧濟禪師大和尚 錬倉之人、世寿七十六歲、永和元卯年正月初八日示寂、至今享保十八丑年、既得三百六十歲、一年相違、年代即鑑

とあるのみで、至極簡單であるところからも推察出来る。これは恐らく大藏院古來の過去帳か三時回向書に記入されたものをそのままとつたもので、中巖圓月といふ本名も、嗣法の記事さへも記されてゐない。ところが次の住持大解宗脱に至り、突如として、自坊の開山が、全く天下無類のすばらしく穎脱した文學僧であることに氣付き、全身全靈を挙げて、その生涯と作品の發掘研究注釋刊行に没頭することになるのである。これは法岩宗珉の全く豫期しないところであった。

それでは、これに氣附いた大解宗脱とは、如何なる人であったのであらうか。さきに挙げた『前住統記』のうちに「大圓脫禪師傳」と称する一文が収録されてゐる。これは大解の前半生の履歴を記したもので、弟子の叙述の体裁にはなつてゐるが、自撰の色が濃い。

大圓脫禪師傳

〔慧進〕

師諱宗脱、嗣象海、播州赤城人、岸氏子、十一辭親出家、登于江山、謁法巖、爲剃度師祝髮、依止數載、十八遊方、初到紀城、見嚴陽・緣巖二老兄學文字、未知有此事、「興同行數人、登高野山、求菩提樹子數株一貫歸」或時看仏祖像、不持數珠、忽放下、思同仏祖矣、十九趣于濃陽、謁綱宗、聽楞嚴經、粗探教意、後參大隋於梅竜、隨衆禪思、昏散互起、工夫不純、廿一往丹陽、聽無門講法華經、「因依桂林大和尚受梵網菩薩戒、然」道心微弱、肯信未定、二十二到甲陽、〔慧林〕參古月於慧林、月因舉等閑擊碎虛空骨語、以示衆、師疑此語、工夫漸熟、未有入處、二十三赴總州、聽定山講碧岩集、不會深旨、空班衆數、「講了歸本國、二十四」頻慚不通仏祖機緣、因閱無門關、疑着趙州無一字、二六時中、逢仏無仏、逢祖無祖、逢菩薩無菩薩、逢羅漢「無羅漢」、逢父無父、逢母無母、逢親券無親券、種々分別境來時磨不無之、如是三年、「或恐工夫不熟、持錐頭利用雕刻無字於左大母指爪上看慚」、工夫一片、胸中但無一字存、二十六載之秋八月、在于江山盛香次、蚊子咬手、吸血腹脹、不能飛、落

席將死、師忽生慈悲心、是知慈悲魔、起立躊躇蚊子、不覺咄出此語
言、曠劫無明、當下消滅、平生參究底話頭、和無明失却了也、胸天
廓然、無一物遮我、九月十二日、聞碧岩集「如見白紙、始知無一字
子」、到香林坐久成勞話、拍手大笑、仏祖骨髓、一時見得了也、觀
喜數日、投機偈云、天上天下、唯我獨尊、三徑依舊、松竹猶存、又
偈云、參尋趙老遇香林、拍手笑中契妙心、仏祖言詮總是夢、多年受
惑病根深「于」時聞象海盛化於洛東、徑行尋訪、海在南禪、因講傳
心法要、師入室、礼拜近前、呈投機二偈、以曲伸多年薰鍊修證之
由、海默聞耳、師更云、某甲到座下、僅聞傳心法要、乃見得和尚胸
中、海云、汝作麼生見得我胸襟、師云、無一物、海云、聽汝所說、
平生修行用心底、甚如法、故省發時、不破転歡喜魔、只今一大事時
也、更參究無字、見處未十成、師云、多年提撕話頭、如湯消永、
泯滅了也、今何參取、海云、雖然魔滅、順我語有必所利、豈敢傷汝
哉、且看投機二偈詰當、然拗向炉中好、師蒙示誨、礼出、以偈附丙
丁童去、第二回持虎鬚次、拈弄德山托鉢話、呈之頌云、

一日德山空托鉢

曹溪鏡裏惹塵埃

雪峯木杓不能用

點破又將來啓其意

今日上堂果異常

碧眼黃頭猶未會

全身依舊睡繩牀

海一見、措席上、詰云、此頃并下語、是汝作也否、師怒云、豈以他
人語、充我見處、海云、汝拈弄此話處、甚諦當、然吾者拈華微笑之
當体也、豈容文字言句哉、約象海見處、汝未十成、更去參究、汝若
十成、爲汝許可、古人到此、未輕印之、師藏機、欲看盡象海深淺、

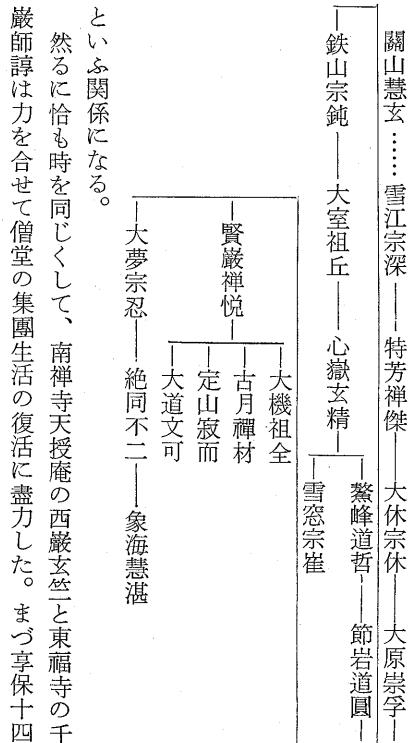
脚跟木点地、謾人不少、
好與三千棒、大小德山、猶作這去就、
是何塵埃、唧汝相見

若我悟木杓便打
不離墮漢、未後句、岩頭未夢見在、
作這是什麼、
者裏何所、在說同說異、
若不逢岩頭、千古之下、遇人之點候、
詎不識漢不得、有何難会、
詎不知名、

六辛亥年十一月十二日也、師行脚之間、參逸山慧後文可・大道等諸尊宿、機
緣不可備載、(括弧「」内は後の訂正書入)

これによると、大解宗脱は、播磨明石の人で、はじめ道號を大圓と稱
し、のち大解と改めた。俗姓は岸氏。十一歳にして大藏院に法岩宗珉
について剃度を受け、十八歳から遊方にして、紀伊の巖陽・縁巖の二師
に見えて、文学を學び、十九歳にして、美濃の綱宗から楞嚴經の講を
聴き、同國梅竜寺の大隋會下で、衆に隨つて坐禪した。二十一歳で、
丹波に赴き、無門和尚から、法華經の講を聴き、桂林和尚から梵網菩
薩戒を受けた。けれども道心の微弱なのを憂ひ、二十二歳にして、甲
斐に赴き、偶々日向大光寺より、遠く仙臺まで脚をのばして参拜の方
式により、大衆の接待をしてゐた古月禪材が、同國の慧林寺で結制大
會を催した際の師家に招かれてゐるのを知つて、その會下に連なり、
「等閑擊碎虛空骨」といふ夢窓疎石の頌の一旬の示衆に疑を抱いて解
くことを得ず、翌年下總の光福寺に赴き、同寺住持定山寂而の『碧岩
集』の提唱會に列なつたが、深旨を會することが出来なかつた。よつ
て講了ののち、播磨の大藏院に歸つて、先師の許に在つた。そのとき
に蚊が手の血を吸つて、腹が脹つて飛ぶことが出来ず、地に落ちたの
を、慈悲心をおこして、踏むまいとし、ついで、これは却つて慈悲魔
の心だと思ひかへして、これを躊躇した。そして思はず「曠劫の無明
は當下に消滅す」と唱へ、平生參究してゐた話頭が無明と共に消却
し、胸中が廓然として何の遮りもなくなつた。その後『碧岩錄』を読
んでも、白紙の如く、一字もないやうに思へ、從來の心地とは一新し
てしまつた。そして香林澄遠の「坐久成勞」の公案のところへ読み来

つて、仏祖の骨髓を一時に見得し了つた氣持になり、二首の投機偈を作った。このやうな悟入の経験といふものは、五山叢林には久しう絶えてないもので、その點で、大解は全く異色の存在であったといへよう。しかし切角投機偈を作つても、受業師法岩では、これを勘驗することとは出来なかつたと見える。恰もこの頃、京都の東福寺天得庵末備中井山の宝福寺より出た象海慧湛といふ人が、妙心寺徳雲院の絶同不二に参じて新しい禪風に染んだ。偶々師兄鐵堂慧石が病篤く、呼び戻されて、宝福寺を繼席したが、のちに江戸に赴く途中、石に躓いて、大いに所悟があり、それより宝福寺には象海を名師と仰いで各地から雲衲が集ること四百餘員、一大叢林をなした。この新しい禪風とは、中世禪林には口訣傳授的な密參の禪しかなく、また僧堂に集つて、集團生活のうちに切磋することもすたれて久しうかつた。しかるに隱元隆琦をはじめとする明朝禪の傳来により、彼等が行つてゐる僧堂生活を目があたりに見て、これを復活すべきであるとの風潮が高まつた。殊に妙心寺の靈雲門派鐵山宗鈍の法系の人々に、強くその主張が見られ、賢岩禪悦・古月禪材・定山寂而及びこの絶同不二、いづれもこの法系に属する。即ち



といふ関係になる。

然るに恰も時を同じくして、南禅寺天授庵の西巖玄空と東福寺の千巖師諄は力を合せて僧堂の集團生活の復活に盡力した。まづ享保十四

年十月十七日、東福寺開山聖一國師円爾の四百五十年大遠説を機會に、折よく同寺に残つてゐた中世以来の古建築である僧堂が、千人以上の雲衲を収容出来るものであるのを利用して、また折よくも同派内に象海慧湛といふ名師のゐるのに着目して、これを井山宝福寺より召寄せ師家として、一大結制大會を催した。その結果が大成功で、千五百員の雲衲を集めることが出来た。この實況を目にした有志の人は、この集團生活を恒常的なものにしたい。そのためには僧堂を各寺に復興しなければならない。しかしそうして、切角成立了た一會をそのまま解散するのは惜しいといふので、翌享保十五年、南禪寺の西巖玄空は、同寺の韋馱天堂を改造増築して假僧堂とし、東福寺から象海慧湛を請じて『傳心法要』を提唱せしめ、了つて雪安居を行ひ、東福寺で雨安居を了つた三十員の雲衲が南禪寺に移錫して、これに参加した。そして、京都の五山が輪次に當番となり、各山廻り持ちで、結制を連續して行ふことになった。これを五山の連環結制といふ。

元來このやうな新しい宗旨は、地方から、下からの盛上りでおきたもので、本山は、どちらかといへば、突上げられて、これに追随する形をとつてゐた。それも江戸幕府の宗教政策が保守的で、中世以来の伽藍法系による師弟關係の確立と、本末關係の堅持で、浮動的な分子の宗門内への侵入を禦ぎ、以て治安の維持に資しようとしてゐたので、このやうに大會を開いて、五百人千人の雲衲を集めることは、幕府として好まぬところであつたために、本山筋は、幕府に對する氣兼からも、かういふ僧堂方式には二の足を踏んでゐるうちに、地方の諸寺では、一足先き、前述の靈雲門派に屬する新進の諸師を招いて、諸方で提唱と安居の大會が行はれた。その諸師のうちで最も著名なのは日向大光寺の古月禪材で、この法系は永くつゞき、明治初年に迄及んで、世によんで「古月下」といひ、やゝおくれて出た白隱慧鶴の門徒（所謂「白隱下」）によつて席捲される迄は、このやうな近世禪林復興の先駆者となつたが、この他、古月と同門の定山寂而やこの象海慧湛、丹

波法常寺の大道文可など、いづれ劣らぬ熱心な新宗旨鼓吹者であつた。

ところで、大藏院の大解宗脱は、上述の略歴で見る通り、甲斐の慧林寺で古月禪材に参じ、下總の光福寺で定山寂而に参じ、最後に享保十五年、京都の南禪寺に於て象海慧湛の『傳心法要』會に列し、恐らくはその後の雪安居にも参加したのであらう。こゝでさきの投機の偈を象海に示して勘驗を求め、その後二回、親しく入室して、象海と應酬し、つい翌十六年十一月十二日にその印可を蒙つてゐるのである。

その他大道文可や逸山祖仁(盤珪永琢の派下の人)にも参じてゐる。このやうに大解は、享保の頃に澎湃としておこった近世禪林の新風に逸早く惹かれた人であり、一種の理想家肌のところと、物事に感動し熱中する性格をもつてゐたやうに見うけられる。そこで自己の住持する寺院の開山への徹底的穿鑿がはじまるのである。禪林の新風のうちには一方では新しい修禪方式を生み出しが、他方では多分に復古的な傾向も強かつた。仏舍利に對する異常な關心——これについては改めて論ずる用意があるが——もその一例であるが、開山祖師に對する尊崇の念といふものも、大いに搔立られた。ところが大藏院の開山中巖圓月は、決して崇高なる禪の悟の奥義を究めた大尊宿といふやうな型ではないのである。寧ろ一種の天才で、人格としては偏頗なところがあるにも拘らず、その著作には、どうしても人を惹きつけるやうなところのある人である。したがつて參禪弁道第一に心掛ける大解などとは、凡そ縁のない存在である筈である。それでも拘らず、大解がその後半生を挙げて、顯彰に熱中するには、何か契機がなければならぬ。そこで思ひ當るのは桂洲道倫といふ人の存在である。

桂洲道倫は、京都の商人甲谷氏の子。正徳四年洛西衣笠山延慶庵の雲崖道岱の室に入り、のち丹波法常寺に大道文可に参じ、更に下總光福寺に定山寂而の弟子玉洲祖億より無相心地大戒を受け、延慶庵に嗣住した。(『續禪林僧寶伝』第一輯卷中)その伽藍法系は夢窓派で

夢窓疎石——觀中中諦——聖仲永先——亮叔□誠——三叔□玄
眞溪周詮——古雲道充——雲崖道岱——桂洲道倫
となるが(『天龍宗派』)、印證系の法系は

鐵山宗鈍——大室祖丘——心嶽玄精——鰲峰道哲——節岩道圓——
賢嚴禪悅——古月禪材——〔大解宗脱〕

——定山寂而——〔玉洲祖億〕——桂洲道倫
——大道文可——〔桂洲道倫〕——〔大解宗脱〕

——大夢宗思——絶同不二——象海慧湛——大解宗脱

といふ關係になる。のち天龍派下から出て白隱慧鶴の徒となつた鹿王院の靈源慧桃に参じたとの説もある(『續禪林僧寶伝』)。宝暦三年冬至に天龍寺後堂寮に在つて秉払、明和三年、速環結制に、東福寺に『枯崖漫錄』を講じ、翌年、相國寺に『夢窓國師語錄』を提唱し、天明五年、圓覚寺に『仏光錄』を提唱し、安永六年八月、天龍寺に住し、退院後、延慶庵に枯木堂を構へて、雲衲を集め、半規矩の僧堂として、接化につとめた。寛政六年四月二日に示寂、寿八十一。學解禪定兩立の人で、右のやうに雲衲の接得に力を致す一方、諸禪錄の注解に意を用ひ、『黃龍南禪師書尺事苑』『枯崖和尚漫錄事苑』『續祖庭事苑』『夢窓國師語錄事苑』等、いづれも「事苑」と題する注譯書を多く著はした。これは宋の陸庵善卿の『祖庭事苑』に倣つた題名である。また儒者江村綏(北海)と親交があつた。北海が『日本詩史』を撰述し、

そのうちに五山詩僧のこと多く触れたのは、桂洲より得た知識があづかって力があつたことと思ふ。もとより桂洲自身、五山文學にも關心が深かつたのは、自身五山派に屬する人として當然である。
大解宗脱はこの桂洲道倫と、遍參の途次、どこかの會下で同參の友人であったのではないか。考へられるところでは、丹波法常寺の大文可の會下、または下總光福寺の定山寂而の會下、或は京都の南禪寺

の象海慧湛の會下といったところである。そして桂洲に對して、自坊の開山中巖圓月のことをたづねたに相違なく、五山文學に關心のある學僧桂洲がこれを知らない筈がなく、大いにそのすぐれたる作者であることを説き聞かせたに相違ない。そこで熱血漢大解は、つひに全身全靈を中巖研究に注ぎこむこととなるのである。そして終にはその詩文集語錄の出版を成し遂げるのであるが、まづその著作の蒐集から手を染めたらしく、同院に現存する『東海一溫集』の写本(大解の書写したもの、版本の「もと本」)の元・亨・利・貞四卷のうちの貞卷の奥に、大解自身が、その諸本發見の因由を「中巖錄書写大意」と題して書いてゐる。それによると、大解は、その語錄が建仁寺妙喜庵に有ると聞き、かねてからそれを書写して、大藏院の常住に備へ、後昆をして讀誦せしめんと思つてゐたが、宝曆七年の夏から秋にかけて、大藏院の本庵に當る南禪寺真乘院に寓居して、つひにこれを書写し、「三十年の願が一日にして冰积した」といつてゐる。宝曆七年から三十年前といへば、享保十年前のこととなり、大解が二十二三歳のときに當り、先師法岩宗珉より開山が中巖の偉大さについて説き聽かされたらしい時に符合する。それ以来、大解はその作品にあこがれ、これを探し求めてゐたことになる。

しかしこのとき得たのは語錄二卷のみであつた。更に南禪寺金地院に『自歴譜』と『中正子』があるのを知り、これも借用して書写した。そのうちに偶然にも一老宿が、北嵯峨の直指庵といふ黃檗派の寺(開山は應元隆琦の直弟獨照性円)に中巖の著作数卷があつて、嘗て見たことがあるといひ、その老宿が直指庵の今庵主を知己であるといふので、その添書を持して同庵をたづね、その借用に成功した。これが本来の『東海一溫集』の詩文の部であった。それは一回の書写本ではなく、本に大小あり、紙にも美惡があり、語にも重出があり、誤脱も多

く、配列も先後錯乱してゐるものであつたので、大解が考へ正して、六卷を三卷とし、金地院の一卷を加へて四卷としたといふのである。これよりさき、宝曆二年冬に、大解は大藏院に於て結制大會を催し、象海慧湛を招いて師家とし、百餘員の雲衲を集め、向谷の田一町を買つて、雲衲常住の資とし、會が了つてから、退院して、寺内の先住南嶺祖常の寮少林庵に退居した。如上の中巖研究は、この退院後のことである。

大解は、一應中巖の著作全部を蒐集整理淨写を終へ、『東海一溫集』四冊にまとめてからは、これが語句の詳しい注解を試みてゐる。少林庵に於て筆録したので、これを『少林筆禪』と題し、六冊ある。細書の爽註になつてゐる。しかし大解は『東海一溫集』の研究をこゝ迄すゝめながら、つひにその上梓を完成せずして、宝曆十二年九月十四日に示寂した。

ついで大藏院の住持となつたのは秀峰宗逸である。明和年間になつて秀峰は先師の遺志をつぎ『東海一溫集』の出版を京都の書肆小川源兵衛に依頼し、ついにその刊行の業をなしとげた。『仏種慧濟禪師語錄』二卷『東海一溫集』五卷である。安永三年は、中巖の四百五十年忌に當るので、桂洲道倫を天龍寺より招いて、『仏種慧濟禪師語錄』の提唱大会を催し、百餘員の雲濟を集めた。これによつて、中巖圓月の作品は、木版として天下に流布し、ついで大正年代に入つてから、上村觀光氏は、その木版本を底本として、これを『五山文學全集』に収め、活字に付して現今我々が見られる形として残されたのである。

大解の熱意はこゝに報いられたといふべきであらう。

なほ、中巖圓月の作品研究は大解以外も行つて居り、桂洲道倫自身も『東海一溫集事苑』を撰した(『見江山大藏禪院歷世紀事』この本は一秩不明部分、丹波法常寺に大觀文珠の書寫したものが存在してゐる)。ついで建仁寺兩足院の高峰東畯も『東海一溫集事苑補』を撰した。⁽⁷⁾當初その書名の『事苑補』といふ題を不審に思つたが、桂洲に『事苑』の撰

述があつたことを知つて、成程と納得が行つた。『事苑』の「補遺」の意である。因みに高峰は明和版本によつて之を注してゐるやうである。

五 大藏院の本末関係

開山中巖圓月の『東海一體集』發掘については、それ自体、重要なことではあるが、本題から離れるので、今はこの位にして、話を大藏院 자체に戻さう。

現在の大藏院は、本来の大藏院に、ある時期から見江院が併合された形ではないか⁽⁸⁾と、先に推察したが、いづれにしても大藏院と稱せられる方が本流になつて居り、それは中巖圓月が開山（勸請であらうが）になつてゐる。この寺が若し断絶することなくつゞいてゐれば、寛永十年の本末決定の際には、當然建仁寺妙喜庵末にならなければならぬ筈である。又見江院が若し一山派の誰人かの開山であつたとすれば、南禪寺雲門庵又は大雲庵末か、建仁寺清住院・大龍庵末か、または相國寺雲頂庵・玉龍庵末にならなければならない筈である。ところが當寺は意外にも南禪寺真乗院末になつてゐるのである。真乗院は臨濟宗大應派の月庵宗光の門徒香林宗蘭の塔頭で、宝徳一年八月三日に南禪寺の塔頭列に加へられてゐる（『南禪旧記』）。この派は南浦紹明（大応國師）の直弟峰翁祖一（美濃遠山大円寺開山）より、大虫全岑（伊豫宗昌寺大通寺開山）を経て月庵宗光（但馬大明寺開山）に到り、山名時熙（巨川常照居士）に深く帰依され、從來地方に伝播した所謂「林下」の一派であったものが、月庵の弟子に香林宗蘭を出すに及び、京都の大徳寺住持となり、つひに南禪寺住持にもなり、一躍五山派の一員となり、南禪寺内に塔頭造営を承認された。それが真乗院である。したがつて、當寺は寺院法制上の取扱では大應派に屬し（それも大徳・妙心両寺派下ではなく）、中巖とは何の関係もないものである。

當寺は中世末に一旦廢絶に瀕したらしく、世代も全くわからず、開

山中巖圓月から二世天翁慶祐まで、二百餘年の空白がある。そして天翁といふ人の経歴も全くわからない。天翁は寛永十二年に寂してゐるから、江戸幕府の寛永十年の本末書上要求のときには住持在任中である筈だが、堂庵に等しいやうな存在として、見のがされてしまったのではないか。第三世の得岩宗鑑は天翁の弟子といふことになつて居り、天翁は他の地からの流入者らしいが、この人は「本郷人」とあるので、この土地の人であり、法名に「宗」字が付いてゐるから、本来は大應派（大應派下か、妙心派下か、又はその他諸々の大應派諸派かはわからないが）の人で、のち天翁の徒となつたもののやうである。しかし、この邊から、大應派との關係はついて来たやうである。次が第四世の舊田智藍であるが、この人はこの地の広瀬氏の子で、妙心寺で第一座に昇り、下野古河の東林寺に住し、晩年歸郷して、當寺に隠栖住持したといふ。他派の者が隠栖住持出来るといふのは、未だ當寺が堂庵としての性格を脱しきれなかつたものといへよう（しかし他派といつても妙心寺の閑山派も大局的に見れば大應派の一分派であるには相違ないが）。

そこで問題になるのは、第五世の蘭州祖秀である。當寺には相當多くの職狀及び官錢請取狀を現藏してゐる。それを逐一調べたところ、寛文七年十一月二日付の南禪寺紀綱から出した、祖秀首座掛塔錢の請取狀があり、その宛所が真乗院になつてゐる。これは、蘭州祖秀が南禪寺に掛塔（その寺の僧籍に加入すること）を許された際に、その禮錢を南禪寺に納めた、その請取なのである。通例、末寺の本山への諸般の手續をするについては、直接には行ふことを得ず、必ずその末寺の属する法系の元締をする「本庵」と稱する本山山内の塔頭を介して行はなければならないので、この場合、大藏院住持蘭州祖秀が本山に納めた掛塔錢の請取が真乗院に宛てられてゐるといふことは、その掛塔錢は、同院を介して納められたといふことで、それは大藏院の本庵が真乗院であるといふことを示し、換言すれば、大藏院は、この時には、既に南禪寺真乗院末寺となつてゐるといふことである。さうすると大

藏院は、寛文年間、五世蘭州祖秀の時代頃から、はつきり南禪寺真乗院末として固定したといふことである。

その後南嶺宗常（はじめ宗梁のち宗梁また宗常と改む）・法岩宗珉・大解宗脱・秀峰宗逸・鳳州宗眼・春莊宗裕・固道宗恭等には、それぞれ南禪寺よりの侍者・藏主・首座・座元の四官の僧階昇進の職状及び官銭・香資の請取（真乘院宛）がのこつてゐるから、この關係は幕末まで続いたと見るべきであらう。しかも天保五年十二月二十日には春莊宗裕は諸山禪昌寺の公帖を、同六年正月一日には十刹禪興寺の公帖を將軍徳川家斉より受け、十刹西堂位に昇り、安政二年十二月十四日には、固道宗恭は諸山禪昌寺の公帖を、同三年正月二十日には、十刹禪興寺の公帖を將軍徳川家定より受け、矢張り十刹西堂位に昇つてゐる。大藏院も堂庵同然の蕞爾たる小刹から、五山派に属し、南禪寺眞乘院末となり、更に進んで、色衣を着用出来る西堂和尚を出す程にその地位を高めて行つたことになる。

たゞここに一つ非常に不思議なことがある。それは、歴代の官銭請取狀のうちに、南禪寺からでないものがあることである。それは大通寺といふ寺から出たものである。しかも同一人が南禪寺からと大通寺からと、兩方兼ねて受けてゐるのである。それには次の三通ある。

貞享五年三月二十一日 大通寺守塔宗達出 宗梁（南嶺宗常）首座轉位官銭請取

元文三年三月二十三日 大通寺維那獨照元豊出 大解宗脱首座轉位

香資請取

元文三年三月二十三日 大通寺維那獨照元豊出 秀峰宗逸首座轉位

宗梁（即ちのちの南嶺宗常）が南禪寺の職状をうけたのは

藏主掛塔銭受取

貞享三年二月晦日掛塔

で大通寺より二年前であるが、これは掛塔であり、僧階の昇進は、この後であるから、或は大通寺の職状と日を同じくするといふこともあ

り得る。

次に大解宗脱は如何かといふと、

藏主掛塔銭受取

享保十三年二月二十八日

後版（後堂首座、即ち首座）元文五年三月二十九日

第一座（前堂首座、即ち座元）元文五年四月一日

となり、大通寺の首座になつた方が、南禪寺の首座になつたのよりも二年前である。

秀峰宗逸は

藏主掛塔銭受取

享保十九年四月十四日

侍者

藏主

後版

第一座

宝曆五年九月十日

宝曆五年九月十一日

宝曆五年九月十二日

となり、大通寺の職状の方がはるかに早いことになる。そして師の大解宗脱と同日付で大通寺の首座に昇進してゐる。同寺の職状受領には時期的にどうも大通寺の方のものは形式的なもののやうに見える。

江戸幕府の五山派僧階の昇進は、室町幕府がそれを直接に取扱つてゐたのとは違つて、各派の本山にその權限を委ねてしまつてゐる。そして各派では、原則的には本山のみが末派の僧階の昇叙を司つてゐたが、末派のうちで「附庸」といはれる寺院については、その寺が本寺と相並んで、その寺の末派、即ち本山からいへば孫末寺院についてのみは、職状を出して、僧階を昇進せしめる權限が與へられてゐた。本来はその僧階は本山の僧階と全く同一の性格を有つべき筈であるが、実際の運用面では、附庸寺院の職状で、座元まで昇進した上でなければならなかつた。よつて附庸寺院の末派の人にして出世を望む人は、附庸寺院の職状と本山の職状を二重に申請ける必要があつた。それ故に一人の

人が本山と、その他の寺院との二箇寺の職状を有する例が見られるのである。

然らば、「附庸」寺院は、如何なる性格のものにその資格が與へられるかといふと、原則として室町幕府から諸山・十刹の寺格に列位されたものに與へられるのである。例へば圓覺寺末派では國清寺・月桂寺、妙心寺末派では清見寺・開善寺などである。その他、無本寺の寺、即ち隸屬すべき本山がなく、便宜上金地院が直接に支配してゐる寺院、武藏の靈山院、同じく秩父の圓福寺、常陸の法雲寺などがその例であるが、かういふ寺でも職状をその末派に頒布することが出来るのである。

すると大通寺といふのは、以上のうちのどれかに宛はあるものでなければならぬ。順序として、南禪寺真乘院の法系で、大通寺といふ寺院があるかどうか調べて見ると、さしづめ伊豫北条の大通寺しか見當らない。大通寺は大虫全岑の開創する所で、真乘院開基香林宗蘭の師但馬大明寺開山月庵宗光のそなた師に当る。江月宗玩の『墨蹟之写』第三十六冊、寛永十二年の部に、大虫全岑の自筆と覺しき大通寺の規式が江月の目に触れたらしく、これが写されてゐる。

一、大通禪寺家訓

住持職事

如老僧平生相兼宗昌寺塔主而可住、更不可有兩人、住宗昌寺之時者、可置看坊於當寺、住當寺之時者、可置看坊於宗昌寺、如或爲乍有益人出來者、可任長老也、莫選自他門派矣、但一住云後、可為塔主計也、凡為長老者、須本律儀、固守規範、若違所定置者、塔主相計、而或請別人、或可自住也、寺口物

一、方丈得分、常住土貢之内、分伍斛、每年可致受用也、寺口物再參濃州遠山之時、留守中規式等、別希在之、同可相順也、
右家訓、非老僧新定之法樣、古今賢聖規矩也、不可不慎、其外細事等、宜委時住持并僧衆、能弁耳、努力々々

文和癸巳六月日

大虫叟全岑(花押影)

これによると、伊豫宗昌寺と共に大虫全岑の開山にかかり、一人にして兩寺の住持を兼帶すべきことを規定し、また美濃遠山の大円寺には輪番住持を勤むべき義務があるやうで、その留守中の規式のことなども見えてゐる。大円寺とは大虫の峰翁祖一開創の寺で、大通寺の本寺筋に當る。

以上によつて知る所は、大通寺は南禪寺真乘院開祖の祖翁の寺であるから、それよりも上位にある。そして大應派のうちの峰翁派下の一派(大虫派)の本拠であり、中世からその派の本寺と見做されてゐた。しかし諸山にも十刹にも列せられてはゐない。その點で若し附庸や無本寺のやうに独立して職状が出せるとなると、非常に異例となるが、事實これが出でるるのが興味を惹くところである。

ところが更によく調べて見ると、江戸時代には、大通寺は既に退転して、曹洞宗の手に入つてゐるのである。同寺の過去帳によると永正元年十一月二日に示寂した玄室守脰といふ人から、曹洞宗となつてゐるのである(因みに宗昌寺の方も江戸の初期、檀那久松定長定直が黄檗派に帰したために、同派の別峰海瑞を招いて、同寺を黄檗派に改めてしまつてゐる)。したがつて、同寺が臨濟宗南禪派下の人間に職状を出すとは考へられない。よつて、大通寺の職状をよく見ると、その差出人である同寺の塔主とか維那の名は宗達及び元豊の二人が見られるが、その宗達は印文には「崇達」とあり、それは大川崇達のことであることがわかる。大川崇達は真乘院の塔主である。また元豊の方も印文には独照とある。大川崇達は真乘院の塔主である。また元豊の方も印文には独照とあり、独照元豊といふ人であることがわかる。この人は或はのちの南溪元豊かも知れず。恐らくは金地院か真乘院の世代であらう。さうすれば、この大通寺の職状は、全くの形式で、南禪寺真乘院が代行して頒布してゐるもので、真乘院が財源を作るために、かゝる名目上の職位を假空に設けて、末派に一種の職銭を課したものにすぎず、祖師大

虫全岑を尊岑する香資の変形であらう。ともかくも近世禪林寺制の上の特異な現象として注意を喚起する必要はあらう。

以上大藏院とは、開山は中巖圓月、したがつて臨濟宗大慧派に属し、寺系では大應派で南禪寺真乘院に属し、しかも中頃以後は、東福寺派下の新宗旨の擧揚者象海慧湛を介して、宗旨的には閑山派靈雲門派の禪風を奉じてゐるといふ三つの顔をもつた複雑な寺院である。中世より近世への日本禪宗の過渡期に生じた変則な寺院として、極めて注目される。しかもその上、この寺の大解宗脱といふ人が、忘れられた中巖圓月の顯彰に力めたといふことは、以上の寺制とは一應全然別箇のやうでもあり、そんな変則の寺院であればこそ、あり得たとも考へられるものである。終に臨んで大藏院住持桜木宗峰師及び副住職青木憲宗師は同寺の記録を快く披閱を許された。又この調査を行を共にし、史料の撮影・筆写に労を惜しまれなかつた東京國立博物館の海老根聰郎氏にも、共にその御厚意に對してあづく感謝する。

註

(1) 『自歴譜』もは六十八歳の年までは自撰であり、その間の住山開山の記録については、細大漏らさず記載されてゐるといへるが、それ以後の門弟の補足した後半生の部は大分粗漏になつてゐるから、その期間には、中巖は或は四国などにも行つてゐるから、その往復に播磨に於て請はれて一寺の開山となつたこともあり得る。

(2) 梅巖芳の「梅」と「芳」との名字相応は、古い時代にもあり得るし、近代にもあり得る極めて通俗的なものであるから、この程度の名字相応があることによつて、この法名道号(字)を古い時代のものと極めてかかるこには多少の躊躇がある。

(3) 『見江山大藏禪院歴世紀事』の第五世蘭州祖秀正徳二年七月八日寂の項に「元祿中處士赤松善太夫者、寄附赤松系圖一卷」と見えるから、法岩の先々代元祿年間には、赤松氏開基説は既にあつたと見える。この系図は当寺に現存する。

(4) 大解宗脱、はじめ道号を「大円」と称した。井山宝福寺の象海慧湛か

ら授かつたものらしく、同寺に象海筆の「大圓」の一大字及び額があつたことが『歴世紀事』の「重器」の目録に見える。

(5) 五山の連環結制のことは櫻井景雄師『續南禪寺史』、白石虎月師『東福寺誌』、拙著(井上禪定師共著)『圓覺寺史』、櫻井景雄師「五山の連環結制について」(『禪文化』第四・四二號)参照。

(6) 明和元年版大藏院藏版の版本は、文字通り同院に蔵せられて、現存する。

(7) 『東海一漁集』は、藤原惺窓の弟子那波道円(活所)によつて、故紙堆裏より発見されている。それは元和六年のことであり(『活所遺藁』卷九)大解の発掘に先立つこと百四十年である。しかしこの発見は上様といふ手段を経なかつたため、単に転写にとどまり、世人の注目を惹かなかつた。妙心寺龍華院の無著道忠も、この系統の本を自筆書写して居り、その本も龍華院に現存(龍田英氏の示教による)してゐる。これには『活所遺藁』所収の「書東海一漁集後」の一文が、そのまま写されてゐる。今回校刊の際に底本に用ひた史料編纂所所蔵の写本『東海一漁集』五冊もこの系統に近い本かと思ふ。

(8) 最悪の場合を想像すると、蘭州祖秀の代に「赤松善太夫」なるものから寄せられた赤松系図によつて、適宜考へ出された、名目上ののみの併合といへなくもない。一種の紛飾である。しかし後年本来の開山中巖の偉大さに氣付けば何もこの粉飾の必要はなかつたのであるが、しかしこれは最も意地悪く想像した場合で、赤松氏との関係があるから、赤松氏の後裔と称するものが立寄り、『赤松系図』を寄附したと見る方が順当であらう。